

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	年度初めに事業計画とともに理念の勉強会を毎年行っている。また、職員会時にも、時々振り返り、確認している。	基本理念、運営方針、行動指針について事務所内に掲示し共有と実践に繋げている。家族に対しては入居時、理念に沿った取り組みについて説明している。月1回の全体会議で振り返りの時を持つと同時に、新入職員に対しては「ここにあるのは私の暮らし」という理念についてあるいは利用者に対しての思いを管理者、主任、リーダーより説明し、日々の支援に取り組むようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	地区の避難訓練・一斉清掃への職員の参加。地区のお祭りへ、寒天蔵のイベント、公民会主催のハイキングに利用者と職員一緒に参加、特に公民館行事には法人の送迎車2台で子供たちを送迎する事が恒例となった。	法人として区費を納め、区の一員として一斉清掃、避難訓練等へ参加している。また、運動会、夏祭り、踊りの発表会、花火大会、公民館主催のハイキング大会等に利用者、職員共に一区民として参加し楽しい時間を過ごしている。更に、中学生、高校生の職場体験を引き続き受け入れ、「傾聴」や「ゲーム」、「楽器演奏」等で利用者との交流の時を持っている。合わせて、地区の保育園児の来訪も定期的であり「踊り」、「歌」を披露していたとき、特に、園児との「手遊び」をにこやかな笑顔で楽しまれているという。バンド演奏、歌等のボランティアの来訪も定期的であり利用者も楽しみにしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	防災倉庫を設置したことをきっかけに、災害時のことについて、会議で話題となり、地域と防災協定を検討中。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	出席頂く地域の方に、お祭りやイベントの誘いを受けて参加している。地域の方の積極的に交流を求める姿勢に温かさを感じ、より多くの利用者様が地域へ出ていく機会を増やせるようにしたいと考えている。	家族代表、区長、民生委員2名、公民館長、寒天蔵「くらの会会長」、愛の会代表、地区婦人会会長、広域連合介護保険課職員、市職員、施設関係者の出席で3ヶ月に1回開催している。利用状況、職員の状況、事故報告、防災関連、地域との連携、交流行事、その他について、意見交換が行われサービスの向上に繋げている。また、地域に密着し開かれた施設となるよう地域内に向け運営推進会議を積極的にアピールし内容のある会議となるよう取り組んでいる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	併設施設の小規模多機能とグループホームは特に市町村との連携は強い。在宅生活が厳しくなった高齢者世帯の相談を受けたり、事業所で困難になったケースの相談をしたり、相互に協力し合っている。	地域包括支援センターと連携を取り、デイリーに様々な相談をし、利用についての紹介も受けている。月1回、2名の介護相談員の来訪があり、利用者とは話をし気付いた事について口頭で報告があり支援に活かしている。介護認定更新調査は調査員が来訪しホームで行い、立ち会われる家族もいる。市主催の研修会等にも積極的に参加している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年二回の身体拘束の研修に全職員が参加している。ベッドを柵で囲まなくて済むよう低床ベッドと衝撃緩和マットを使用したり、センサーマット使用時は必要性をカンファレンスし、必要以上に長期間使用しない様になっている	拘束を必要とする利用者はなく、拘束のないケアに取り組んでいる。歩行不安、転倒落下防止のため、家族と相談の上センサーマット使用の利用者が三分の一弱いるが、主に夜間トイレ介助のための使用であり状況を見て外したりもしている。所在確認は全体を見渡せる場所に職員が常にいるよう心掛け、安全な介護に繋がっている。年2回の研修会に合わせ日々の介助の中で気づくこと、特に「スピーチロック」や「安易な言葉かけ」等、自分だったらどうかを考え話し合いを行い、意識を高め取り組んでいる。	

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎年、全職員を対象に虐待防止の研修を実施。グループホームでは言葉の虐待について考え、声かけが利用者様のストレスになっていないかカンファレンスを行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	身体拘束と虐待の研修時に、その項目を入れている		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	時間をとって丁寧に説明している。特に利用料金や起こりうるリスク、重度化や看取りについての対応方針、医療連携の体制等については詳しく説明し、同意を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時には常に最近の様子を伝えたり、アイバット内の写真を見てもらう等して、家族と積極的に会話し、なにか気が付いたことがあれば意見を聞くことに努めている。年1回の家族会実施。	殆どの利用者が自分の意思を伝えられる状況であり、言葉に合わせ表情や行動から思いを受け止め支援に繋がっている。家族の来訪は毎日、週1回、月1回と様々であるが全家族の来訪があり、来訪時にはきめ細かくお話しするよう努めている。年1回敬老会に合わせ家族会を行いDVDで「1年間の様子」を披露し、看取りについての話と質問を受け回答したり、食事会等もやっている。合わせて、新年会、クリスマス会、あいあい祭りの計4回の行事案内を行い家族に参加頂いている。更に、誕生日、母の日等に花のプレゼントを届けられる家族もいるという。また、夏、冬の2回、利用者個々の様子を担当職員より手紙でお知らせし喜ばれている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の見解や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回の複合施設会議には三事業所の代表が出席し、意見や提案を出し合っている。毎年、全職員を対象に管理者、理事長との個人面談を行っている。グループホーム内では不定期開催のカンファレンス、月2回のユニット会議、月1回の職員会にてさまざまな意見を吸い上げている。。	月1回の職員会議では連絡事項、利用者の1ヶ月間の様子や変化の確認している。また、月2回実施されるユニット会議においては気づいたことを即座に話し合い支援に役立っている。年1回、12月には理事長、管理者による個人面談が行われ、意見・要望の汲み上げ、仕事の取り組み等について話し合いの場が持たれスキルアップに繋がっている。更に実務者研修、初任者研修、ケアマネージャー研修の研修費用を法人が全額負担し、資格取得をバックアップしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	キャリアパスの見直し、就業規則の整備を行った。処遇改善手当は、個々の勤務状況を考慮している。また、近年高齢者の雇用延長も積極的に進め、希望に沿った条件を整えられるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月全職員対象の研修を実施しているほか、資格取得を目指す職員にはその応援制度がある。初任者研修、実務者研修等。年に二回実施の新入職員研修はベテラン職員が講師となることで講師の学びの場ともなっている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	長野県宅老所、グループホーム連絡会に加盟している。研修会の中での交流はあるが、相互訪問等は実施していない。		
II 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面談では本人に会って、心身の状況や本人の気持ち、環境、何に困っているのか等、細かく教えていただく。入所当初は、本人が家族にだけ伝えている希望や不安など、遠慮なく言っていたりするように初期の関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前面談で、ご家族の困っていること、不安なこと、要望等ゆっくり細かくお聞きする。その上で、私たちにできること、出来ないこと、ご家族に協力していただきたいこと等も伝え、「協力し合って利用者本人の生活を支えていきましょう」というお話をします。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所の相談を受けた段階で、その方が本当にグループホームが良いのか、それとも他のサービスで在宅生活が可能ではないのかという視点で関わり、実際、他の在宅サービスを選択された方もいる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	それぞれに出来ることを出来る範囲で役割を持って頂き、洗濯たたみや調理、茶碗洗い、茶碗拭き、台拭き等をやってもらっている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と通院、美容院に行く、法事に行く、外食に施設の職員と一緒にいく、入浴の声掛けに来ていただく、衣類の片づけ等家族にもできることをどんどんやってもらっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	所属していた踊りの会の発表会に数人で行ったり、地区の花火大会に出かけて、友達と会ったりする等、外出計画を立てて職員が引率している。	近所の方や友人、親戚の来訪があり、談話室で親しく懇談されている。職員と一緒に年賀状に「絵」を描き、家族に出される方が数名いる。買い物の日が週2回あり希望する物を職員と共に出掛け外の空気に触れている。また、馴染みの美容院に「お喋り」を楽しみに家族と出掛ける方や法事に出席されている利用者もおられ、入居前からの関係が継続されている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日々の様子を見ながら利用者様同士の相性、居心地の良さを考慮し、食事席を考えたり、活動中も交流が図れるよう声掛けあったりしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の事業所に移られた場合でも利用者の状況や様子を口頭や書面で伝え、連携に努めている。時には本人に逢いに行ったり、ご家族とも面会時、会話する等、経過を見守っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	生活歴や本人の言葉から気持ちをくみ取っている。「ここにあるのは私＝本人の暮らし」本人はどうしたいのかを常に頭に置いてカンファレンスし、ケアにあたっている。	家族からお聞きした生活歴や「好きな物、嫌いなもの」などを参考にしながら日々接する中で自己決定を重視し、状況により提案し、自分で選んでいただくように進めている。気付いた言動はケース記録に残し、出勤時に目を通し確認し、支援に取り組んでいる。また、利用者とは1対1で話をする時間を設け、意向を把握し希望に沿った支援に繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時にセンター方式の暮らしの情報シートへの記入依頼をするが、入所後、本人から聞き取ったことを記録に残し、皆で共有している。面談時にご家族から聞けることも多い。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常生活の中で、生活のリズムやその日の体調や気分の変化に気を配り、スタッフ間で口頭や記録で情報を共有し、現状の把握に努めている。何がどこまでできるか常に観察している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	チームでケアプラン立案すべくカンファレンスを行っている。月の予定表にモニタリング、ケアプランカンファレンスを組み込み、見直し、計画、実行を行っている。	職員は2名の利用者を担当し、その方のことを誰よりも知るように心掛け、関わる時間を多く取るようにしている。居室の掃除、特にトイレの掃除は念入りに行い、衣類の管理、希望の買い物等を一緒に行っている。担当職員の出勤時にカンファレンスを開き、全職員の意見も聞きプランを作成し、基本的に6ヶ月に1回の見直しを行い、変化が見られれば随時見直ししている。家族に対しては作成時に報告を行い、要望等を確認し、あれば付け加えている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録は気づき、関わりを中心に個別に記録されており、職員間で情報の共有がなされている。また、個別の健康管理台帳もあり、日々の健康面の変化に気づきやすい。介護計画はそれらの情報をもとに見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者の状況や外出計画、家族の都合のつかない方の受診の付き添い(眼科、歯科等)、車いす利用の方の病院への送迎等、その時の必要に応じて柔軟に対応している。		

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のスーパーに買い物に行き、カートを押して品物を選ぶ、保育園の運動会に出かけて行って、プログラムの一つに参加する。公民館事業に参加する等、出来るだけ地域行事に参加するようにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本は在宅の時からのかかりつけ医に継続してかかってもらっている。家族の事情に合わせて、受診と往診の両方で対応。医療面で心配な時は主治医と電話やFAXでいつでも相談できるので家族も安心されている。	かかりつけ医については入居前からの継続受診の方がおり、家族に付き添いをお願いしている。また、入居前からのかかりつけ医の月1～2回の往診対応の方が半数ほどおり、ホーム協力医の往診、受診対応の方が三分の一強という状況で、利用者、家族の希望に沿った医療支援に取り組んでいる。ホームの看護師が日々の健康管理を行い、合わせて併設施設の3名の看護師との連携を取り、万全な体制を整えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員を配置しており、医療連携体制を整えている。介護職員は利用者の体調を把握し、気づいたことを看護師に報告し、連携をとっている。複合施設なので同一敷地内他事業所の看護師の協力もある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院になるときは主治医から入院の協力医療機関へ連絡を入れ、スムーズな受け入れができています。医療連携相談室とも連絡はスムーズなので、状況、退院日の把握、退院後の注意点等、必要な情報はすぐわかるようになっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人や家族の意向を踏まえて対応していくことを看取りに関する指針として、契約時に説明し、意向の確認をしている。職員は看取り研修を受け学びを深めている。主治医と連携を取り、家族への説明の場を作り、看取りプランの計画実施を行っている。	法人として「看取りに関する指針」があり利用契約時に説明の上、同意を頂いている。また、状態に変化が生じターミナル期に入るような状況になった時には医師を交え話し合いの場を持ち、家族の意向も確認の上、再度同意書を頂き看取り支援に取り組んでいる。職員に対しては毎年外部より講師を招き看取りについての研修を行い、知識の向上と心構えについて学び、利用者、家族に寄り添った支援に取り組んでいる。開設以来7名の利用者を看取り全職員でお見送りしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の研修を職員全員が受けている。特に消防署員による救急法は毎年数名ずつ3時間講習を受け、全員が受けられるようにしている。窒息時の対応の実地演習は毎年数回行っている		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、消防署の協力を得て、利用者参加の避難訓練を行っている。訓練後、事業所で振り返りを行い、対策を共有している。地域との防災協定は検討中。	年2回、春と秋に消防署に計画書を提出の上、複合施設合同で防災訓練を実施している。消防設備会社社員の参加の下、設備の点検や機器の使用方法を確認し、消火器を使つての消火訓練も行っている。通報訓練では携帯電話に緊急メールを一斉送信して訓練を行い、利用者も全員参加で非常階段まで移動して避難訓練を行っている。備蓄は法人の防災倉庫に「発電機」、「石油ストーブ」、更に、「おかゆ」、「五目御飯」、「ラーメン」、「水」等が、利用者と職員分の三分日プラス地域住民分が準備されている。また、地域との防災協定締結についても準備中である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入所時、どう呼ばれ方をしたいか確認し、本人又は家族の希望する呼び方で呼んでいる。依頼型の言葉かけは「誠心会のごころ」に記されており、基本であるが、親しみが馴れ合いにならないように注意している。	利用者との言葉遣いについては特に気配りし、「柔かく」、「丁寧に」話し掛けるようにし、また、人権を尊重しつつ気持ちよく過ごしていただけるようにしている。特にリビング等では利用者への問い掛けの声が大きくなることがあるが、周りに解らないよう気を付け接するようにしている。入室の際にはノックをし「失礼します」と声掛けをし、利用者の呼び方は希望に合わせて苗字か名前を「さん」付けでお呼びしている。年1回外部講師を招き、プライバシー保護や尊厳を守った介護についての研修会を行い意識を高めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご自分から希望を言うことが難しい方には職員から声をかけるようにし、常に自己決定できるような声掛けに努めている。服を選ぶ、食事を選ぶ、時間を選ぶ、やりたいことを選ぶ等、自分で決めることを大切にしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	睡眠や起床時間、入浴等、それぞれの生活パターンに合わせている。中には、着替えに1時間、歯磨きに1時間、食事に1時間半かかる方もいるが、その方のペースで、しかも健康を守るよう、さりげない声掛けに努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	昔からきているお気に入りの服、ご自分で作った服、形見だからと毎日着ている方もいる。服を選ぶ方には選んでいただいている。入浴時着替えを用意する際は選べる方には自分で選んでもらう。行事や外出計画の前にはネイルや口紅をひく。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	グループホームで作る昼食は、まず、メニューを掲示し、楽しみにしてもらっている。作るとき、一緒にできる所は行い、下膳、食器洗い、食器拭き等も一緒にしていただいている。	自力摂取の方が四分の三おり、一部介助でキザミの方、全介助でトロミの方がそれぞれ数名ずつという状況である。昼食は以前栄養士が立てた物を参考にホームで調理している。朝食と夕食については法人の管理栄養士が立てた物を複合施設の厨房で調理しお出ししている。お手伝いは能力に合わせ後片付中心に参加を頂いている。月1回両ユニット合同で食事会の日があり、職員が利用者の希望を聞き手作り調理で楽しい食事の時間を過ごしている。また、正月、節分、お彼岸、お盆、クリスマス等には季節の料理をお出しし味わっていただいている。更に、年5～6回、外食の日を設け少人数に分かれ出掛け、回転寿司等、好きな物を食べ楽しんで。合わせて、干し柿作りや野沢菜漬け等の漬物作りも引き続き行われている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	健康管理表を活用して日中の水分量をチェックし、飲めない方には好きなジュースを提供し、熱いお茶がよいか、ぬるめが良いのか嗜好に配慮して提供出来ている		

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自立の方では声掛けして、介助必要な方には付き添い、歯ブラシや口腔ティッシュ等、それぞれのケアに合った物品を使用してケア出来ている		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用して排泄パターンを知り、定時の誘導ではなく排泄サインを読んで声掛けし随時の排泄ケアが出来ている。居室にトイレがあることが、排せつの自立に役立っている。看取り期の方以外、全員、トイレで排泄できている。	自立し布パンツ使用の方、一部介助でリハビリパンツとパット使用の方、全介助でオムツを使用したりリハビリパンツとパット使用の方など、利用者の状態に合わせて対応している。居室にトイレがあり排泄の自立に取り組んでいるが排泄表でパターンを把握し、個々のパターンに合わせて声掛けを行いトイレにお連れしている。スムーズな排便を促すために毎朝の牛乳他、水分摂取に心掛け、合わせて適度な運動にも取り組んでいる。また、3種類の大きさの違うパットを時間により使い分け、費用の軽減に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	苦手でない方には、毎食事牛乳の提供とヨーグルト類も比較的回数多く提供している。毎日の歩行訓練等、運動する時間もある。リウマチの薬等、服薬内容によって便秘になる方もあり、主治医に薬の調整の指示を仰いでいる		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴予定表はあるが、午前、午後の希望を聞き作成し、その日の体調や気分を確認して入浴出来るようにしている。外の景色を見ながらのんびりと入浴していただいているほか、菖蒲、ゆず等季節の変わり湯や入浴剤を使って楽しんでもらうように工夫している	見守りも含め全利用者が何らかの介助が必要になっている。基本的に週2回の入浴を行い、希望により3回入浴される方もいる。拒否の方もいるが声掛けの仕方を変えたり工夫をし、週2回の入浴を行っている。入浴剤も使い、季節によっては「ゆず湯」、「リンゴ湯」、「みかん湯」、「かりん湯」等も楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	食後の過ごし方はTVの前のソファや居室などそれぞれに合わせている。就寝時間も早い方は19時頃遅い方は21時までTVを見て過ごしている。またベッドの位置もそれぞれ決めてもらっている		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書を個々のファイルに整理しており、いつでも確認できるようになっている。名前、時間日付を読み上げ服薬ミスのないよう努めている。服薬変更があったときは体調の変化の確認に努め、看護師に報告している		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	その方の出来ることを出来る時に、洗濯干しや畳むこと、野菜を切る事など願っている。特にお葉をつける時、干し柿づくりはみんな張りきっていた。ぬり絵が好きな方は塗り絵をし、ハーモニカの得意な方は出番が多い。		

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	その日の希望に沿ってまでの対応は出来ていないが、週2回の買い物には一緒に出掛けたり、リハビリを兼ね散歩で近くの神社まで歩くことに取り組んでいる	外出時は自力歩行の方、歩行器使用の方、車イス使用の方がそれぞれ三分の一前後という状況である。日常的には複合施設の中を1階～3階まで散歩したり、天気の良い日には外に出て複合施設の周りを散歩している。また、週2回の買い物の日には職員と共に交代で外出し外の空気に触れている。更に、年6回の外食の他、年間行事計画があり、保育園運動会、ふれ合いパンコ、お花見、いちご狩り、ブドウ狩り、紅葉狩り、また、地域のレクリエーションにも参加し、楽しいひと時を過ごしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人が所持している方もいる。管理の難しい方が殆ど。事務所でお金を預かって買い物に行ったときには、それを本人に渡し、本人がお金を支払えるよう支援していたが、今年度から立替金払いとして対応するようになった。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望がある際には電話を一緒に掛けに事務所まで付き添う。また、今年度は新たに職員と一緒に年賀状を出す事を試みた		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間は落ち着いた色が使われており、外の景色もよく見え、明るくゆったりとした造りになっている。また、季節感のあるものを飾ったり、温度、湿度の調整を行い、快適な環境で生活できるよう支援している。特に設備として設置されている大型の加湿器がこの時期活躍している。	展望ルームからは雄大な八ヶ岳連峰の山々を望み、共用部分の大きな窓からも四季の趣が感じられる風景が目に入り、ゆったりとした気持ちにさせてくれる。そのような中、テレビを見たり職員に寄り添われ会話を楽しむ利用者の姿が見られた。エレベーターホール正面の壁には行事の際の利用者の様子を写した写真の数々と、合わせて、顔写真入りの職員紹介が掲示されている。また、デイルーム内部の壁面には手作りの節分の鬼の仮面など季節の飾りつけがされ活動の一旦を窺うことができた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールにソファが1つだが、就寝前のひととき等TVの前で座っている姿がある。食事の席は関係性や介助量を考慮して時々席替えを実施している		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室に持ち込むタンスや家具は家族が自宅で使用していたものを使用し、家族の写真を集めた額を飾ったり、仏壇や位牌を置いている方もいる	広々とした各居室には洗面台、トイレ、クローゼットが完備され、利用者に優しく、暮し易い造りになっている。担当職員の手により整理整頓が行き届き、清潔感溢れる中で利用者が自由な時間を過ごしている。持ち込みは家族と相談の上、使い慣れた家具、イス、テーブル、テレビ、ハンガーラック等が持ち込まれ、自分の住み家を作り上げている。好きな花や家族の写真に囲まれ思い思いの生活を送っていることが感じられた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	全体がバリアフリーの造りになっていて、廊下・食堂以外にも共用のトイレや浴室等随所に手すりを設置している。キッチンを利用者が使いやすいよう低めの高さにしてある。		